

Peace

2025



東大生協平和国際活動報告集

東大生協

Peace2025 ～平和・国際活動報告集～



Peace Now! 参加報告	P.3
広島参加報告	～P.9
長崎参加報告	～P.11
被団協田中様講演録	～P.15

☐ Peace2025 発行にあたって

この冊子について

本冊子『Peace2025』は、東大生協の平和・国際プロジェクトが2023～5年度に実施した、平和や国際理解に関する取り組みを紹介するものです。生協が主催する研修ツアー「Peace Now !」への参加活動を中心に東大生協での取り組みを紹介しています。この冊子を通して、私たち東大生協の実施する平和・国際活動へのご理解を深めていただければ幸いです。

「Peace Now !」への参加

Peace Now ! は全国大学生協連合会が主催しています。生協に加入していればあなたも Peace Now ! に参加できます。

東京大学生協では、平和について考える活動であるこの Peace Now ! の参加について、毎年金銭的な補助を行い、主に学生の参加を促してきました。帰ってきた参加者にはこの平和報告集にご協力いただいています。

「Peace Now !」とは？

この冊子のメインとなるのが、Peace Now ! の参加報告です。これは、毎年夏に広島、長崎、沖縄の3地域で開催されている、大学生協組合員を対象にした研修ツアーです。今年度は複数年度まとめということで、広島、長崎の両地域に参加した組合員による活動がまとめられています。

「Peace Now ! 2026」開催要項

※ 感染症拡大状況等により変更の可能性があります。

日程：8月上旬～9月上旬 予定

参加資格：大学生協の組合員であること

興味をお持ちの方は、ぜひ以下までご連絡ください。

〈駒場〉東大生協駒場学生委員会（C学）

E-Mail: utcoop.student.comm@gmail.com

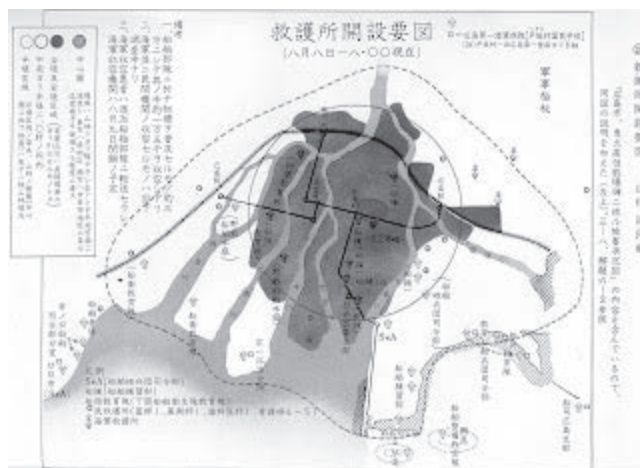
〈本郷〉組合員センター

TEL: 03-3814-1543

なお、希望者多数の場合には選考を行う場合がございます。

Peace Now !

HIROSHIMA



▲広島原爆における被爆中心圏と全壊・全焼区域を示す地図

出典：NGO 平和の市民連盟 HP

http://ngonowarjp.blogspot.com/2016/08/blog-post_28.html

広島への原爆投下

1945年8月6日、世界で初めて原子爆弾の炎が広島を焼き尽くしました。原子爆弾が戦争において使用されたのは、この広島と1945年8月9日の長崎の二例だけです。原子爆弾は地上600メートルの地点で炸裂し、14万人以上の命が奪われました。

- 4/27 原爆投下目標の選定が開始される
- 5/8 ドイツが降伏する
- 7/16 原爆実験「トリニティ実験」成功
- 7/26 ポツダム会議
- 8/6 広島への原爆投下
- 8/9 長崎への原爆投下

広島と軍

広島には大日本帝国陸軍の第五師団司令部が置かれ、旧陸軍被服支廠や糧秣支廠、兵器支廠といった軍の施設が並び立つ軍都でした。

また、海軍の鎮守府や幹部候補を育成する海軍兵学校がおかれた呉とも近く、旧軍との深いつながりがあったと言えます。

MEETING



Peace Now! Hiroshimaでは拠点となるホテルの大きな部屋に参加者全員が集まり、平和を考えるための様々なミーティングや学習会が行われました。

昔と今を知るために

Peace Now! について ABOUT Peace Now!

現地で“見る”

戦跡や石碑、資料館、米軍基地など、様々な場所に赴いて学びます。教科書やテレビでは学べないことを自分の目や耳、肌で感じることができます。

体験者や現地の人の声を“聞く”

戦争を体験した方や現地に住んでいる方から、戦争当時のことや今抱えている問題を直接聞きます。一人ひとりの人生から、深く学び考えることができます。

仲間たちと“話す”

全国から集まった参加者と、自分の想いや考えを伝え合います。様々な見方や考え方を知り、自分の考えを整理し深めることができます。それぞれの地に戻った後も、お互いの活動を共有するなど、全国でつながりができます。

Peace Now!をつくる現地の大学生たち

Peace Now!の内容は、その地域の大学生を中心につくっています。現地で過ごす学生が感じていること、考えていること、伝えたいことがたくさんつまっています。
(大学生協連HP「Peace Now!」より抜粋)

Peace Now! Hiroshima 獲得目標

- ①過去と現状と理解し、平和について学習する意義を改めて考える
- ②様々な視点や考え方に触れ、平和な社会を考える
- ③自分自身も平和な未来を創る一員であることを自覚する。

学習会 MEETING

Peace Now! Hiroshima 全体を通して、フィールドワークと連動するかたちで学習会が行われました。内容としては、原爆被害の詳細な説明や、現在に至るまでの核兵器の歴史などについての解説が行われました。様々な視点から平和を見つめ直し、改めて定義しました。実行委員の説明をもとに、班の仲間とともにグループワークを行い、平和に対して理解を深めることが出来ました。

学習会の前後には感想交流時間があり、5人ほどの班でそれぞれ考えたことを話し合いました。全国から集まった大学生からは、それぞれの地元根ざした意見も聞くことができました。班の中には広島出身のメンバーもいて、今と昔で平和記念資料館の展示内容がどのように変わっていったかなど説明してくれました。一方で、自分の意見をまとめながら話したり、レジュメに書いたりする機会も多く、思考の整理に使える時間でもありました。

また3日間を通して、広島のを実際に歩き、見て、感じることによって、自分がいる場所には80年前に原爆が落とされ、多くの方が亡くなったのだということに思いを馳せるとともに、平和と戦争は常に地続きであるということを強く実感しました。

09:30～	朝の会
09:50～	フィールドワーク
12:20～	感想交流・昼食
14:00～	グループワーク
18:15～	夜の会
19:00～	夕食
21:00～	就寝

参加報告

Hiroshima

Peace Now! Hiroshimaでは、平和記念資料館や原爆ドームといった施設に実際に足を運び、核の悲惨さを学習しただけでなく、被爆者の方の講話をうかがう機会もありました。

生の声を聞く

フィールドワーク FIELD WORK



▲平和記念公園

1日目には、平和記念公園内に位置する平和記念資料館を訪れました。資料館は、政治的立場や国籍に関係なく、核のない平和な世界を希求するすべての人に開かれています。館内には、被爆した建物の瓦礫や犠牲者の方々の服・写真などの物品が展示されており、原爆の威力や悲惨さが非常に生々しく感じられました。また、原子爆弾を含む核兵器の歴史や影響などを包括的に学べるコーナーもあり、膨大な数の核兵器が存在するこの地球で我々はどうのように核兵器と向き合い、平和を実現していくのかということについて深く考える契機となりました。

2日目には、平和記念公園とその周辺を巡るフィールドワークに参加しました。被爆して崩壊した墓石や原爆ドームなど、今も残る被爆の跡を実際に見ることで、原爆の被害がいかに甚大なものであったかということを感じ知らされました。また、原爆によって犠牲となった朝鮮人の方々の慰霊碑や、世界中の言葉で「平和」と刻まれた平和の門なども見学し、原爆で命を落としたのは日本人だけではないことを学ぶとともに、核兵器の廃絶や世界平和の実現には、地球上の全ての人々の不断の努力が必要であるということを感じました。

被爆者講話 HIBAKUSHA LECTURE



▲被爆者講話の様子

被爆者である切明千枝子さんの講話を1日目にうかがいました。切明さんは、1945年当時15歳で高等女学校4年生でした。爆心地から2 kmほど離れた路上で被爆しましたが、奇跡的に命に別条はなく、すぐに女学校に駆け込みました。そこにいたのは、皮膚がただれ落ちたり、既に亡くなっていた後輩生徒たちでした。切明さんが語る、自身も怪我を負いながらも、亡くなった生徒を火葬し校庭に埋めたというエピソードが強く印象に残っています。

また、切明さんの父親は、原爆の爆風による怪我はなかったものの、爆発直後に市内に入り残留放射線を浴びてしまったため、原爆症を発症して命を落としたということでした。当時の人々が放射線に関して詳しい知識を持たなかったが故の悲劇でしたが、核兵器の爆発だけでなく、放射線の被害の大きさを象徴するお話でした。

終戦から今年で80年。切明さんは今年で95歳。被爆を実際に経験し、語り継げる人々の数は、年々減り続けています。それとともに、戦争の記憶は私たちから段々薄れつつあります。しかしながら、世界では戦争は亡くなっていません。私たちは、戦争とは何か、核兵器とは何かということをも今一度考え直し、尊い平和の実現のための普段の努力をしていかなくてはならないと強く思いました。

FIELD WORK

Hiroshima

Peace Now! Hiroshimaでは部屋の中でのミーティングにとどまるだけでなく、実際に被爆地である広島を歩いてみるフィールドワークが行われました。このページ以降は主に、実際の資料・建物などについて実施されたフィールドワークについてご紹介します。

建物に息づく空気を感じる

広島平和記念資料館 HIROSHIMA PEACE MEMORIAL MUSEUM

広島平和記念資料館は、広島に原爆が投下されて以降、その危険性と世界の恒久平和を訴えるために広島市の平和記念公園内に建設されました。1949年に広島市中央公民館に「原爆参考資料陳列室」が設置され、原爆被災資料の公開展示が始まったことがこの前身になっており、1955年に「広島平和記念館」が開館、これを改築し、1994年に、「広島平和記念資料館」として開館しました。そして、2019年に「実物資料で表現する」方針のもと、3度目のリニューアルがなされました。

館内では、被爆者の遺品や写真、絵などをもとにして被爆の実相を展示し、被爆した人々が被爆するまで実際に生きていた個人として語りかけてきます。そして、被爆前までの広島の日常、被爆後まで続く苦しみを展示したのち、原爆の開発から投下まで、そして核兵器の現状や広島の平和への取り組みについて展示しています。

Peace Now! Hiroshimaの参加者は、1日目にここを訪問しました。被爆者ひとりひとり、そして残された家族の苦しみや悲しみは想像を絶するもので、経験した方にしか分からない部分もあります。しかし、だからこそ、原爆や被爆の実相についてきちんと学ぶことが大切です。そしてこのような悲劇を二度と起こすことがないように、我々未来を担う世代は努力することが求められているのです。



▲広島平和記念資料館

原爆ドーム ATOMIC BOMB DOME

1996年に世界遺産に登録された原爆ドームは、元は広島物産品の販売促進を図るための「広島県物産陳列館」として建てられた後、「広島県産業奨励館」に改称されました。

原爆ドームの保存に関しては、「原爆投下後の悲惨な状況を思い出したくないので取り壊すべきだ」という意見と、原爆がもたらした惨禍の証人として保存すべきだという意見の対立がありました。保存運動のきっかけとなったのは、被爆が原因で亡くなった学生の「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも、恐るべき原爆を世に訴えてくれるのだろうか」と記された日記だそうです。現在は、原爆の悲惨さを伝える「ノーモア・ヒロシマ」の象徴として、核兵器の廃絶と恒久平和を訴えるシンボルとなっています。



▲平和記念公園側から見た原爆ドーム

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 HIROSHIMA NATIONAL PEACE MEMORIAL HALL FOR THE ATOMIC BOMB VICTIMS

原爆死没者を追悼すると共に平和を祈念するため、2002年に開館した施設です。ここでは原爆死没者の氏名と写真の登録・保存や、被爆体験記・追悼記の整理や公開がなされており、これらは現在でも募集しています。また地下の平和祈念・死没者追悼空間では、原爆投下の8時15分を表したモニュメントを中心として被爆後の広島の街がパノラマで見ることができ、その街の様子から原爆の被害の凄惨さを感じずにはいられませんでした。



▲被爆後の街並みを表現したパノラマ

□ 本川・袋町小学校 HONKAWA/FUKUROMACHI ELEMENTARY SCHOOL

本川小学校・袋町小学校はともに爆心地からほど近い場所にある小学校で、原爆により多くの教員や児童が犠牲になりました。現在はこちらの小学校にも原爆の被害や、当時の様子を今に伝える資料館が併設されており、誰でも見学することができます。

袋町小学校の資料館には、離れ離れになった家族を探すために壁に記された伝言が今なお残っており、原爆が日常の生活に残した傷跡を痛感させられます。

本川小学校の資料館は、被爆当時の校舎が使用されており、原爆の熱線による焦げ跡が随所に残っていて、たった1つの爆弾の威力の凄まじさを感じることができます。

またパネルで原爆投下前の小学校の日常が紹介されており、被爆 ▲本川小学校に併設されている資料館。地となる前の広島の人々の生活がしのべれます。



□ 旧日本銀行広島支店 FORMER BANK OF JAPAN HIROSHIMA BRANCH

旧日本銀行広島支店は、広島市内にある日本銀行のかつての営業所です。現存する貴重な被爆遺構の1つであり、広島市指定重要文化財として保存されています。

内部には、当時の広島市内の被害状況を表す写真展示がなされているほか、当時被害を受けガラス窓の破片が刺さって壁に穴が開いた部屋がそのまま保存され、当時の状況が伝わってきます。

また、現在は文化施設としても利用されており、参加者が訪問したときには、演奏会が催されていました。



▲旧日本銀行広島支店。

□ 広島赤十字・原爆病院メモリアルパーク HIROSHIMA RED CROSS HOSPITAL & ATOMIC-BOMB SURVIVORS HOSPITAL MEMORIAL PARK

広島赤十字・原爆病院の被爆遺跡を、病院の改修の際に移設し公園として整備した物です。現在の病院の南側に位置し、常時解放されています。

メモリアルパーク内には、爆風を受けてゆがんだ鉄製の窓枠や、飛び散った窓ガラスの破片の跡がおびただしく残る壁、そして慰霊碑や被爆直後の広島に医薬品を届けたマルセル・ジュノー医師のモニュメントなども置かれています。



▲爆風により歪んだ窓枠。爆風は北側（爆心地側）から直撃し、この西側の窓枠は外に歪んでいる。



▲メモリアルパーク入口。

□ 広島市役所旧庁舎 HIROSHIMA CITY HALL FORMER GOVERNMENT BUILDING

広島市役所には、爆心地から1.02kmに位置し、原爆投下時に倉庫として利用されていた地下室が今も現存しています。

現在は資料室となっており、被爆した旧庁舎の外壁の一部や被爆した職員の証言ビデオなどが閲覧できます。

また、展示室の真上の地上部分には、四隅に池が配置されています。これは、水と緑と文化のまちづくりを目指す広島市にふさわしいものとするともに、水を求めていた原爆犠牲者への慰霊の意味も込められているということです。

この展示は、被爆した広島市の行政目線からの記録が残されており、被爆したその日から復興に向けて尽力する市職員の努力が痛いほど伝わってきました。



▲旧庁舎資料展示室への入り口。

FIELD WORK

Hiroshima

Peace Now! Hiroshimaでは部屋の中でのミーティングにとどまるだけでなく、実際に被爆地である広島を歩いてみるフィールドワークが行われました。このページ以降は主に、実際の資料・建物などについて実施されたフィールドワークと、今年度の平和記念式典においてなされた平和宣言についてご紹介します。

生の声を聞く・空気を感じる

旧宇品陸軍糧秣支廠 FORMER UJINA ARMY FIELD DEPOT BUILDING

現在では戦争の「被害者」としての側面が強調される広島ですが、戦前においては「軍都」と呼ばれ、軍事的に重要な役割を担っていたこともありました。なかでも、明治時代以降軍港として多くの兵士を送り出した宇品港（現広島港）は、「軍都」広島の名残を数多く残しています。

旧宇品陸軍糧秣支廠は、こうした広島の軍事遺産の一つです。この支廠は兵士の食料と軍馬の餌を供給する基地として用いられ、同じく広島に設けられた被服支廠、兵器支廠とともに宇品港から送り出される兵士を支えました。

明治時代当時、東京を起点とする鉄道の西端は広島であったこと、大型船が運用できる宇品港もあったこと、陸軍によって両者を結ぶ宇品線が整備されたことから、この地域は急速に開発されていくことになりました。広島の発展の背景には、こうした軍の存在が少なからずあったことも見逃すことはできない事実です。

現在では宇品線はなくなり、この支廠もモニュメントとしての外壁を残すだけとなってしまいましたが、戦争による加害の歴史を振り返るのに非常に大切な気付きを与えてくれる遺産でした。



▲旧宇品陸軍糧秣支廠。現在は解体され、外壁のみがのこされている

広島大学附属中学校・高校 HIROSHIMA UNIVERSITY HIGH SCHOOL

1905年に広島高等師範学校としての開校以来、120年を超える歴史を持つこの中学校・高等学校も、戦争遺産を考える上では重要な意味を持っています。

前身となった広島高等師範学校は、東京高等師範学校に続く第二の高等師範学校として設立され、日本の教育界をリードしていく存在でした。1929年には専攻科を改組する形で官立の広島文理科大学が設立され、多数の師範学校・中学校教員を全国に輩出することになります。戦前の広島は「軍都」であると同時に「学都」でもあったということを象徴しているようです。

このように戦前に大きな役割を果たした広島高等師範学校でしたが、1945年の原爆投下では、市内の他の建物と同様に大半の建物が全壊しています。しかしながら、この学校の講堂は軽微な損傷で済み、被爆者が風雨をしのぐための避難所として用いられたといいます。この講堂の特筆すべきところは、改築こそされたものの当時のままの姿が保たれ、さらに現在でも講堂として使用され続けている点です。重厚な印象を与える古典様式の内装や、「2587」と皇紀で記された竣工年などを見ると、当時この講堂が使われていた様子を思い浮かべずにはられませんでした。

損傷・解体などで市内でも当時のままの姿を留める被爆建物が少なくなっていくなか、当時の姿を留め、さらには当時と変わらない用途で使われ続ける講堂は、戦争遺産の継承を考える良いきっかけを与えてくれました。



▲広島大学附属中学校・高等学校の講堂。被爆建物としては珍しく、被爆前と全く同じ用途で使われ続けている。

今から80年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を茶毘に付した被爆者がいました。「死んでもいいから水を飲ませて下さい!」と声を振り絞る少女に水をあげなかったことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、独身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話をしてみることが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約9割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらす得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際に心に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自国のことのみに専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではなく、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の

中でできることを見つけ、行動することです。広島市は、皆さんが「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がっていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみに専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいませんか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないですか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和都市のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の8,500を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促していきます。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに応え、「ヒロシマの心」を体現することにほかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全に陥りかねないNPT(核兵器不拡散条約)が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後盾になるはずで、是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第1回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が86歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆80周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和7年(2025年)8月6日

広島市長 松井 一實
出典:広島市ホームページ
「平和宣言【令和7年(2025年)】」
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/atomicbomb-peace/1036662/1003065/1015114.html>

Peace Now! Nagasaki

Peace Now! Nagasaki では拠点となるホテルの大きな部屋に参加者が集まり、平和を考えるための様々なミーティングや学習会が行われました。

Nagasaki

Peace Now! Nagasakiについて ABOUT Peace Now! Nagasaki

Peace Now! Nagasakiでは、ナガサキの被害や加害の歴史、現在進行形の核問題など、様々な角度から平和を学ぶことができます。また、実際に長崎の被爆遺構を巡ったり、被爆者の声を聴くことで、平和の価値観を深めることができます。全国各地からの仲間との交流を通じ、自身の想う「平和」について向き合い、これから何ができるかを一緒に考えていきましょう！

(大学生協連HP「Peace Now!」より抜粋)

Peace Now! Nagasaki テーマ

- ①長崎の地を通して、歴史や平和に関する学びを深める。
- ②参加者が自らの言葉で積極的に平和について語り合い、様々な思いを基に、平和について考える価値を見つける。
- ③今後の平和学習や平和活動に向けて、1歩を踏み出すきっかけを得る。

▼研修のタイムテーブル

13:00～	開会式
13:20～	アイスブレイク
13:40～	被爆者講話
15:20～	フィールドワーク
18:50～	感想交流
19:20～	夕食、入浴
21:30～	就寝

07:30～	朝食・朝の会
09:10～	移動・フィールドワーク
12:40～	昼食・学習会
13:30～	心に残る1枚
13:50～	ポスターセッション
15:30～	閉会式
16:00～	解散



▲ポスターセッションに向けた準備

長崎原爆について ABOUT ATOMIC BOMBING IN NAGASAKI

広島への原爆投下から3日後の8月9日、長崎市上空にアメリカ軍のB-29爆撃機が飛来し、原子爆弾「ファットマン」を投下しました。炸裂時刻は同日午前11時2分です。長崎に投下された原爆の原料はプルトニウム239であり、広島に投下されたウラン235を原料としたものに比べ、1.5倍の威力を持っていました。しかし、長崎市は周りが山で囲まれた特徴的な地形であったため、熱線や爆風が山によって遮断された結果、広島よりも被害は軽減されたと考えられています。

9日朝は警戒警報が出ていましたが、午前10時には解除され、多くの市民が仕事や学校へ赴き生活している中で、突如起きた悲劇でした。当時、長崎市の人口はおよそ24万人でしたが、原爆によって約7万4千人が亡くなったと推定されています。

被爆者講話 ATOMIC BOMBING EXPERIENCE LECTURE

被爆者講話で語られたのは、原爆がもたらした悲惨さでした。一瞬で日常を奪い、人間の尊厳を破壊し尽くした原爆の生々しい証言は、聴く者の心に平和の尊さと、戦争の非情さを深く刻みつけます。

しかし、講話は単なる悲劇の記憶に留まりませんでした。戦争の責任について、被爆者の方の口から「決してアメリカだけが悪いわけではなかった」という言葉が出たことです。その後、グループワークを通じて、一般市民が最大の犠牲者となるのが戦争の最大の悪であるという結論に至りました。この講話と議論は、過去の悲劇だけでなく、平和を維持するための多角的な視点と、命の重みを再認識させる、貴重な体験となりました。



▲国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の水盤を追悼空間から見上げる様子

FIELD WORK

Nagasaki

Peace Now! Nagasakiでは、全身で感じる、メモや写真で記録する、過去を想像することを意識しながら、長崎に残されている原爆遺構を訪れました。ここでは、訪れた原爆遺構の一部を抜粋してご紹介します。

長崎原爆資料館 NAGASAKI ATOMIC BOMB MUSEUM

長崎原爆資料館は、原子爆弾が人類に及ぼした想像を絶する被害の状況を後世に伝えると共に、長崎市民の平和への願いを広く国の内外に伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与するための施設として設置されました。

被爆資料や被爆の惨状を示す写真等の展示をはじめ、原爆が投下されるに至った経緯、核兵器開発の歴史、平和希求などのストーリー性のある展示が行われています。

また、県外での原爆展の開催や資料の貸し出しなどの平和推進の取り組みや平和学習の支援も行われています。



▲原爆落下中心地公園にある
原爆落下中心地碑

浦上天主堂 URAKAMI CHURCH

当時のカトリック信者たちが30年の歳月をかけて、レンガを積み上げて浦上天主堂を建てました。爆心地から東北東に500mの所にあったため、原爆の熱線と爆風によって全壊しました。

被爆当時、浦上天主堂には約30人の信者がいましたが、その全員が死亡しました。また、長崎市にいた12,000人の信者のうち、8,500人が原爆によって死亡したと言われています。

現在の浦上天主堂は昭和34年に再建されたのち、昭和55年に改築されて現在の姿になりました。

平和公園 PEACE PARK



▲平和公園にある平和祈念像

原爆落下中心地公園の北側、小高い丘の上にある平和公園は、悲惨な戦争を二度と繰り返さないという誓いと、世界恒久平和への願いを込めてつくられました。

平和祈念像は長崎市民の平和への願いを象徴しており、その姿は神の愛と仏の慈悲を象徴し、天を指した右手には“原爆の脅威”を、水平に伸ばした左手には“平和”を、軽く閉じた瞼には“原爆犠牲者の冥福を祈る”という想いが込められています。

平和公園の中には長崎刑務所浦上支所跡地が残されています。当時としては珍しい鉄筋コンクリート造でしたが、爆心地から最も近い建物であったためほとんど倒壊しました。当時、中国人や韓国人も収監されていたため、原爆で亡くなったのは日本人だけではありません。

城山国民学校 SHIROYAMA ELEMENTARY SCHOOL

爆心地から西に約500mの地点に位置しており、約1400名の児童、28名の教職員、105名の学徒報国隊員が亡くなりました。

被爆後も教室として利用されていましたが、新校舎を建てる際に、その一部が被爆遺構として保存されることが決定されました。被爆当時のまま残され、中に入って見学できるため非常に貴重な建物です。現在は児童によって資料館になっており、被爆後の写真や遺品などが展示され、一般に向け公開されています。

核兵器のない未来へ

このバトンをあなたに

日本被団協 代表委員 田中 熙巳

去る 2025 年 5 月 17 日、日本
原水爆被爆者団体協議会、通称日本被団
協の代表委員である田中熙巳様の講演が行
われました。

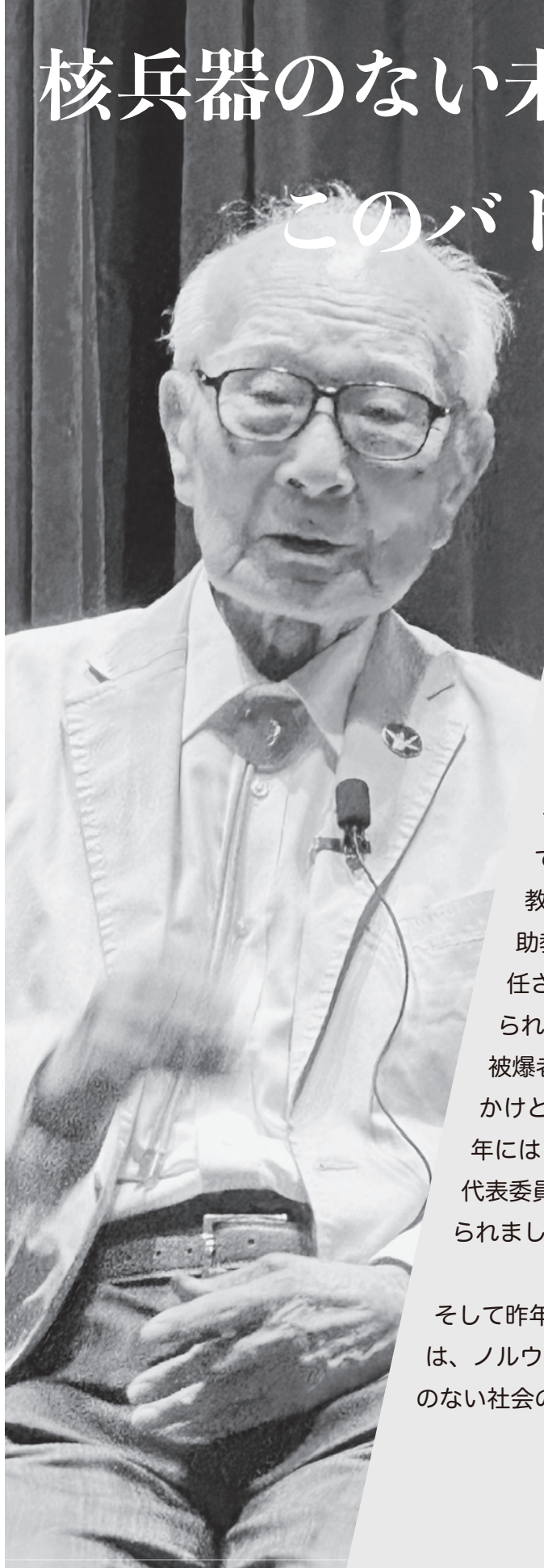
田中熙巳様は、13 歳の時に長崎市で被爆さ
れました。

その後、東京生協で職員として勤務されたのち
東京理科大学に進学され、在学中には大学の生
協設立運動に参加し、初代専務理事を務められ
ています。

教育者・研究者としては、東北大学工学部の助手・
助教授、そして十文字学園女子短期大学の教授を歴
任される傍ら、大学生協の活動にも深く関わり続け
られました。

被爆者運動においては、日本被団協が結成されるきっ
かけとなった第二回原水爆禁止世界大会に参加。1985
年には日本被団協の事務局長に、そして 2017 年には
代表委員に就任され、長年にわたりその中心を担ってこ
られました。

そして昨年（2024 年）12 月、ノーベル平和賞の授賞式で
は、ノルウェーの首都オスロから全世界に向けて、核兵器
のない社会の実現を力強く呼びかけられました。



講演録

●ご挨拶

皆さん、こんにちは。日本被団協で代表委員をしております田中です。- 中略 - 短い時間に何かから話せばいいかと思うのですが、言い忘れてはいけないので、最後に言わなければいけないことから、まずお話をさせていただきます。

●ノーベル平和賞を受賞した理由

ノーベル委員会はなぜ昨年、日本被団協にノーベル賞を受賞させたのかということですが、これは、ノーベル委員会は今の核情勢、ロシアが核で威嚇しながらウクライナを攻撃していると。- 中略 - 実は、ロシアとイスラエル問題をノーベル委員会は非常に危機を感じていまして、これを何とかして抑えないといけないと考えています。

その時に80年間核兵器が使われなかったのを考えると、いろいろあったけれども、日本被団協という団体を広島と長崎の被害者たちが作って70年に亘って核兵器は人道に反すると、絶対に使ってはいけない兵器だと、廃絶させなければいけないと叫び続けてきていた。

それはノーベル委員会の言葉によると「核のタブー」だと。- 中略 - 核のタブーを日本被団協は作り上げてきたと。それが今崩されようとしているということでした。

だとすれば、もう一度広島、長崎の被爆者たちに、証言を通して核兵器が非人道的な兵器で絶対使ってはいけない、タブーだということをもう一度きちんと世界中に広める必要があるというふうにノーベル委員会が理解したのです。- 中略 -

ですから私が皆さんに言うのは、被爆者の話を聞いて日本被団協がどういうことをやってきたかということはもちろん大事ですけども、そのことを勉強して被爆者たちは頑張ったなと手を叩いて褒めて下さるということではダメなのですよと言っているのです。それはもう被爆者が望んでいることではない。そういうことではないのです。

被爆者は、今までやってきたことをもっと続けていかなければ核兵器は廃絶されない。- 中略 - だとすれば、これから世界を支えていく人たちは被爆者たちがやってきたことをきちんと受け継いで、そして核のタブーが崩されないように、また、新たに核のタブーをしっかりしたものにしていくために働いてもらいたい。- 中略 -

ですから、逆に若い人たちが今の状況を切り開い

ていくには、被爆者の話を今のうちに聞いておこう。それでも、もう生き残っている人は少ないですから、もう気力だけでなく私たちが80年間に亘っているいろいろな財産を残してきたのです。意識的にね。それは証言を文章にする。小説にする。絵に描く。動画にする。- 中略 -

それを今度は若い人たちが、100%活用していただいて、そして核兵器とはこういうものだということをやぜひ語り継いでいただきたいということであり、今までやってきたことをもっと続けていかなければ核兵器は廃絶されないと思っています。

これが、私がいつも最後に申し上げるお願いです。- 中略 - それだけをまず忘れないうちに申し上げておいて何かからお話しましょうか。

●被団協のできるまで

- 中略 -

第五福竜丸被災の翌年の1955年、広島で「原水爆禁止世界大会」というのを開いたのです。- 中略 - 第二回の長崎の世界大会をやる時に全国で発掘されて救援をされ始めた被爆者たちが長崎に集まってきたのですね。

- 中略 - 呼びかけをして日本被団協を結成しようということで、1956年の8月10日に日本被団協というのは結成したのです。

●被団協の活動目標

会を作りましたのでの運動目標を、日本被団協をどう目標で何をやっていくかということが議論されて、一つは原爆の被害は戦争によって起こされたのだから、きちんと政府はその被害に対して対処する。少し難しい言葉では償いをする。国家が補償するというようなことをやらしてもらわないといけない。それを要求していこうということになるわけです。- 中略 -

もう一つは何回も言っていますが、原爆が非人道的な兵器だということを体験した人たちは、- 中略 - 何としても核兵器はなくなっていくと思ってきた。- 中略 - どうしたら核兵器を地球上からなくすることができるかということを常に考えて、- 中略 - 運動をしていこうということの二つを結成の時に決めたわけですね。それは一貫してその目標を求めた運動を、私たちは今日までやり通してきたというふうに思っております。

●若い世代に伝えたいこと

ただ、被爆者は高齢化していますので、これ以上やっていくというのは大変なので、私たちがやってき



たことの本当の努力と熱意を若い人たちが自分たちの問題として捉えてほしいと考えています。というのは、今ある核兵器が使われるのは、今、若い人たちが生きている世界で使われるわけですね。-中略- もし核兵器が使われるとしたら、今、元気な人たちの上で核兵器が爆発するということになる。

しかも今の核兵器の量は、本当に只事ではないですね。-中略- 例えば「12,000発、今地球上に核弾頭があります。」と言っても、12,000発がどういう状況かというのは皆さん想像されないですね。しかも「その内の4000発は、今すぐ責任者がボタンを押せば、あるいは事故があれば爆発する状態にあります。」ということをやっても、「あ、そうか」と。-中略-

しかも「日本が唯一の戦争被爆国」と言っているのですけれども、一番たくさん持っているアメリカの核兵器に頼ろうとしているのです。-中略- 核兵器は使わないでくれと言うことくらいは日本の政府は明確にアメリカに伝えなくてはいいけない。

-中略- 私たちは核兵器がもう一度戦争に使われることは絶対許してはいけないというふうに思っております。

それが4000発。今直ちに使える状況にあるということは、本当に只事でないということです。皆さんに肝に銘じていただきたいなと思っているのです。

●被爆者を支える法律/被爆死者の魂の言葉 -中略-

私たちが日本政府に要求してきたことの一つに、被爆者を支える法律の制定があります。運動の結果、主に二つの法律を作らせることができました。一つは、放射線による健康被害の医療費を国がみる「原爆医療法」。そしてもう一つが、生活を援護するための手当などを定めた「被爆者特別措置法」です。この二つの法律を早い時期に作らせ、運動を通してその中身を少しずつ充実させてきました。

しかし、これら二つの法律は、あくまで生きている被爆者を対象としたものでした。私たちが強く訴え続けてきた、原爆によって亡くなった多くの死者に対する国の償いや対策が、そこに

は全く含まれていなかったのです。

そのことに対する被爆者の長年の怒り、そして無念の思いがあるわけです。

私は怨念があるのではないかとと思っています。だから私が「もう一度繰り返します。」と言うのは、そのことを、その3つ目の法律のことを紹介したのです。-中略- 聞いていらっしゃる方は、被爆者だけでなく、皆さんたちの中にも、「あの言葉が良かった」と、「あの言葉に感動した」というふうにおっしゃってくださる人がいたり、-中略- なぜそれが受けたのかなとつい最近まで一生懸命悩み続けたのです。

ここ、本当にひと月ぐらいの間にふっと思い浮かびました。それは、魂が私の体に入ってきたからだなと。ずっと思っていることを想いではなくて、本当に宇宙の中に存在する魂が、そのことについて私を喋らせたのだなというふうに思ったのです。

●私の体験と生活協同組合のこれから

私の体験はあちこちで書いていますのでここではないと思いますが、簡単に言いますと、13歳、中学一年生でしたけれども、まあ当時は軍国少年でしたから戦争が負けるまで、死んでもやはり戦争しないといけないと思っておりましたが、原爆の惨状を見て、これはたとえ戦争といえども、戦争を許したとしてもこの武器を使うのは絶対いけないことだと幼心にも思いました。その気持ちは今もずっと持ち続けているつもりです。

-中略-

その後の生活は父親がいなかったので大貧乏をしまして、-中略- 生活協同組合の運動がやっぱり素晴らしい運動だと今でも思っております。

だから資本主義体制に代わる社会体制、経済体制をどうやって作っていくかというときに、私は生活協同組合のやり方というのを絶えず研究していかれるのがいいのではないかと思います。-中略- 私も私なりに今でもこだわっておりますので、そのことを最後に申し述べまして私の話を終わりにいたします。どうもありがとうございました。



私が感じたこと

本郷生協学生委員一同

田中様の講演録を聞いて、言葉の一つひとつが持つ重みに、私の心は強く揺さぶられました。これまで歴史の教科書で学んできた「原爆」という出来事が、単なる過去の事実ではなく、一人の人間の人生を根底から覆し、今なお続く筆舌に尽くしがたい苦しみをもたらした、生々しい現実であることを改めて痛感させられました。私自身、去年の夏に生協主催の平和活動 Peace now!に参加し、実際に広島を訪れた身であり、講演の節々で当時の様子を頭の中で追体験するような感覚がありました。

講演を聞いている中で、私が強く考えさせられたのは、平和を希求する想いと、私たちの暮らしを支える生協の活動との間にある、深いつながりです。生協は、組合員一人ひとりのより良い暮らしを実現するために、助け合いの精神で成り立っています。安全な食料、安心できる製品を手にすることは、私たちのささやかな、しかし根源的な願いです。しかし、そもそも「平和」という土台がなければ、その願いすら叶えることはできません。田中様のお話にあるように、一瞬にして日常が破壊され、家族や友人が奪われ、生きることさえ脅かされる状況下では、「より良い暮らし」を語ることなど到底不可能なのです。そう考えると、生協が平和活動に取り組むことは、極めて自然で、本質的な使命であると理解できます。それは、単に政治的なスローガンを掲げることではありません。田中様のような被爆者の方々の声に耳を傾け、その体験と想いを次の世代へと語り継いでいくこと、それが私たちの日常の暮らしを守るための最も重要な活動の一つなのではないでしょうか。

講演の中で、私が感じた点が田中様のメッセージが未来を向いていることでした。若い世代に自身の体験を伝えることを、単なる伝承としてだけでなく、未来を変えていく力になって欲しいという強い意志に、私たちは真摯に応えなければなりません。

私たち生協組合員にできることは、決して小さくありません。まずは、この講演録の内容を家族や友人と共有し、対話の輪を広げること。そして、生協が主催する平和学習会やイベントに積極的に参加し、学びを深めること。さらに、ユニセフ募金や平和をテーマにした商品を利用することを通じて、世界中の人々のくらしと平和に想いを馳せること。こうした日々のささやかな実践の積み重ねこそが、大きな平和のうねりを生み出す原動力となると信じています。田中様の一つ一つの言葉は、私たちに重い問いを投げかけていました。それは、過去を忘れず、未来に対してどのような責任を負うのかという問いです。この問いに対し、私は生協の一組合員として、「平和なくして、豊かなくらしなし」という言葉を胸に刻み、日々の活動の中で平和への貢献を続けていきたいと、固く決意しました。

特に我々学生委員は直接生協と学生の間を繋げることができる立場です。学生の生活を様々な点で支える生協の役割の中の平和活動の重要性を再認識し、普段の活動の中から、平和に対してどのような意味づけができるのか、よく考えながら今後の学生委員の形を見定めていきたいと強く感じました。



発行：東京大学消費生活協同組合

編集：東大生協平和・国際活動プロジェクト

東大生協駒場学生委員会（C学）

東大生協本郷学生委員会（H学）

TEL：03-3814-1541（組合員センター）

URL：<http://www.utcoop.or.jp>（東大生協）

http://www.utcoop.or.jp/cgaku/news/news_detail_2170.html

（東大生協の平和活動）



Peace2025